三ツ世巡り　雪、幽か

初瀬こより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三ツ世巡り　雪、幽か

【Ｎコード】
Ｎ３５８４Ｙ

【作者名】
初瀬こより

【あらすじ】
　雪深い村。鬼殺しの僧侶が訪れた村の名家。鬼に殺された名家の主人。その奥方の語る鬼。罪深く傲慢な者達はそれでもなお生きる。

序（前書き）

この話は単品でもお読みいただけるようになっていますが、『三ツ世巡り』、『三ツ世巡り　幕間』の続編となっています。

序

　石畳を規則的な足音と衣擦れの音が這ってくる。それは丁度彼の目の前で止まった。

　そして格子の向こうの男が敬礼する気配。

　だが足音の主はそれに答える気配すらない。ただ隠す様子など微塵もない怒気を全身から滲ませて見下ろしていた。

「――顔を上げなさい」

　言われるがまま顔を上げると、切れた唇や腫れた顔が痛んだ。

　そうして大きな黒い瞳と目が合う。見慣れたその顔を見ると、んだか無性に可笑しくなってきてしまい、勝手に顔が弛んだ。

　その様を見た大きな黒い目は不機嫌に細められた。

「何が可笑しいの？」

「色々？」

　茶化すような物言いが気に入らなかったらしく、彼女はますます不機嫌に顔をしかめた。

「辻堂（つじどう）から聞いたわよ。莫迦（ばか）じゃないの」

「否定はしないよ」

　怒りに満ち満ちた声音だが、慣れ親しんだその声に気が安らぐ自分がいた。

　だがもちろんそれは彼女の神経を逆撫でるだけだ。彼女は届くわけもないというのに、常のように張り飛ばそうとその香り豊かな白く細い手を振り上げた。

「のっ、臨様（のぞみさま）！」

　鉄格子の向こうの男がさすがに制止し、彼女は唇を噛みしめ手を下ろした。そして絢爛豪華な古式ゆかしい着物をまとったまま、仁王立ちして見下ろしてくる。形のよい細い眉がひそめられ、豪奢な着物が汚れた石畳につくことも厭わず彼女は格子を握り、目線を合わせてきた。

「あんたが何も持たない一介の人間だったなら、極刑ものだわ」
「そうだな」
「隙間風も吹かない、布団も畳もある牢になんて入れてもらえないのよ」
「うん。俺は運がいいな」
口から流れるままに言葉にして答えていると、やがて彼女は絞り出すように言った。
「……その時折思い出したように死にたがる癖、何とかしなさいッ」
その言葉にやんわりと笑むことで応えると彼女は強く鉄格子を握りしめ、また「莫迦」と呟いた。
やがて散々彼女に無視され続けた男によってほぼ強引に追い出されていく彼女を虚ろに視界に映しながら、小さく息を吐いて目を伏せた。
後悔はしていない。
そう思いながらぼんやりと、自らがこの場所に至るまでの経緯を夢心地に思い返していった。？

一話

　薄く雪の積もった道を荷馬車に便乗して往き、村の入り口で案内役と合流して目的地に辿り着いたのは太陽が真上に昇ってからだった。
　墨染の僧衣に錫杖を手に持ち、編み笠を被った僧侶は「林田」と表札の掲げられた屋敷を見上げて感嘆の声を上げた。
「……でっかい家だなー」
　笠の下から覗く顔はまだ若い。まだ二十を幾らか越えたばかりだろう。だがそれより目を引くのは、笠から覗く黒髪だ。この辺りではまだ僧侶は剃髪することが当然と考えられているからか、それともこの大きな屋敷の前に立っているからなのか道往く人々の視線は無遠慮なまでに彼に向けられる。
「林田家はこの村の名主を務め、過去には地方官も輩出した家だからデカイんだよ。ここに来る前に話しといただろうが」
　そう不機嫌に答えたのはこの辺りではまず見かけない、洋装の青年だった。こちらも僧侶と同じ年頃だがその身なりから貴族か官吏か、身分ある人間であると推測される。
「一応この地方で一番大きな家って言われてるんですよ。先代のお若い頃などは行政にも多大な影響力を持っておられたと聞いています」
　そして僧侶と洋装の青年の後ろでにこやかに告げた少年はさらに若い。どう見てもまだ十三、四歳だ。　粗末な着物の端々からは痩せ細った手足が覗くが、決して裕福ではないこの辺りでは珍しいことではない。だがその表情や態度は明るく、粗末な身なりなどやがて誰も気にも留めなくなるほどだ。
　少年は二人の前に回り込み、やはり笑顔で年季の入った門を開けた。
「どうぞお入りください。林田家当主がお二人をお待ちかねでござ

います」
屋敷内は古く、廊下を歩くと今にも抜けそうな音がした。確かに外観は立派なだが老朽化が酷い。二人を先導する林田家の奉公人だという少年がこっそり話したところによると、昨今では林田家の権勢は斜陽の一方なのだという。と言うのも前当主は放蕩に放蕩を重ね、そのくせ先々代までのような才覚には恵まれなかったらしい。そうして林田家の財政はすっかり傾き、近隣の村人達からの信用までも失い、今やこの大層な屋敷に奉公にあがっているのも少年と若い女中の二人だけだというからその傾き具合は相当なものなのだろう。

「本当はこういうこと言っちゃダメなんですけどね。俺、一応この家の奉公人だし」

そうは言いながらも少年は笑っている。おしゃべりで愛想がよい質なのだろう。

彼は最近になって林田家に奉公に上がったらしいが、当主も前当主もとにかく人間的に尊敬できない上、人数不足の激務。いずれ別の奉公先を探し出ていくと話した。

「ま、俺みたいなの雇わなきゃままならないって時点で、この家も落ちるとこまで落ちたってことですかねぇ」

少年は嘆息交じりに言い、長い廊下の突き当たりの襖を前に立ち止まった。

「さ、こちらです。旦那様。お客様をお連れ致しました」

襖の向こうに声をかけて、少年は廊下に膝をつき、両手で襖を開けて二人を座敷内へと促した。

「ああ、よくいらして下さいました！」

日の差す広い座敷へ一歩入るなり、やけに明るい声に歓迎される。洋装ではないが、身なりのよい三十がらみの男だ。髷（まげ）は結っていないが村ですれ違った人々とは比べ物にならない仕立ての良い着物に羽織を纏っていて、この男が例の「人間的に尊敬できない当主」なのだとすぐわかった。

「ささ、どうぞお座りください」

勧められるがままに腰を下ろすと男は深々と頭を下げた。そして隅に控えていた女中らしき若い女とその隣に座したで愛想のよい少年もそれに倣った。

「ようこそお越し下さいました。私が林田家当主の要蔵（ようぞう）でございます。この度は遠方までの御足労、痛み入ります」

深く下げ過ぎて逆に卑屈な感のある要蔵に対し洋装の男は軽く頭を下げ、淡々と答えた。

「内務省地方監査官（ないむしょうちほうかんさかん）の辻堂（つじどう）と申します。そしてこちらが」

「多儀（たぎ）。『鬼殺し』です」

辻堂は目線だけを隣に座る僧侶を向けた。

タギはにっと目を細め、言葉を打ち切った。

短い挨拶に要蔵は顔を上げて少しばかり困惑の表情を浮かべたが、すぐまた低頭した。

「御多忙な官吏の方にわざわざこのような辺境の地までいらしていただき恐縮です」

「いいえ。大帝陛下と国家と人民に仕えることが我々官吏の務めなので。それよりもお話を伺いたい。こちらの前当主が鬼に殺害されたという話ですが」

「はい。もう一月ほど前のことではありますが……」

要蔵はようやっと顔を上げ、ゆっくりと話し始めた。

それは年の暮の近づく頃の朝だったという。

この屋敷に仕える女中が林田家の前当主・林田喜兵衛（きへえ）に朝餉（あさげ）の支度が整ったと知らせに行った際、屋敷の奥の喜兵衛の寝所の外から声をかけた。だが返事はなく、中を確かめてみても布団の上にその姿はない。厠（かわや）にでも立ったのかと思い、女中は先に喜兵衛の妻である嘉江（かえ）の元へ朝餉を運ぶことにした。そして朝餉を手に庭に面した廊下を通りかかった際、ふいに庭に目をやると喜兵衛が仰向けに倒れていたという。女中の悲鳴によって要蔵や少年が駆け付けたが、

喜兵衛は既に絶命していた。その手足や首を異常な方向にひしゃげて。
明らかに異常な事態にすぐに駐在所に通報し、隣村から警官が駆け付けたがそれ以上どうなるともなかった。
ただ、喜兵衛は何者かによって殺害されたのだとただそれだけが確かであると言われたのみだった。

「警察の話では、父の体はあり得ぬほどの強力で捻りつぶされたことは確かだろうと……」
そこまで言って要蔵は目を伏せ、口を噤んだ。
座敷内が重い空気に包まれる中、タギの軽い口調だけが軽い。
「ああ、それで鬼の仕業じゃないかって？」
真剣みの感じられないタギの調子に辻堂がたしなめるように睨みつけるが、彼は気にも留めず先を続けた。
要蔵は口元を押さえ小さく頷いた。その顔色は悪く、これ以上深く聞ける雰囲気ではない。どうしたものかとタギが何とはなしに奉公人達の方を見た時、あの愛想のよい少年と目が合った。
彼は主の様子を見て、これ以上は無理だと判断したのか代わりに口を開いた。
「この辺りには昔、鬼が住んだそうなのですよ」
「へぇ」
鬼が昔住んでいた……よくある話だ。
よくある、噂話の域を出ないただの与太話のひとつか。タギは冷めた心地で思ったが、少年は続けた。
「奥方様がお輿入れなさった村の辺りでしたかね、随分昔に飢饉があって。その際に口減らしに捨てられた子供が飢餓の苦しみと周囲への憎悪から鬼に変じ、時折村人を襲うようになったとか」
「その鬼に実際に襲われたっていう人間なんかは？」
「いますよ……えーと、五十年くらい前までは山に入ると鬼に襲われるとか言われたって俺も聞いたことがあります」

「じゃあその五十年間は、その鬼は何もしてないってことか」
「まぁそうなっちゃいますすね」
何でもないように少年は答えた。
この少年、タギと通じるところがある、と辻堂は胸の内でひそかにため息を吐いた。
そんな辻堂の胸中など知る由もなく、二人は会話を続けた。
「でも昨今は何もなくとも、現実にかつて被害はあったそうなので、年配の方は今も鬼を恐れていますね。五十年前なら当時のことを覚えている人も少なくないですから」
「確かにその通りです」
要蔵は相変わらず口元を押さえながらだが相槌を打った。
「そのせいか母も、父のことがあって以来どうにも何かに怯えるかのようでして」
「母っていうと、喜兵衛さんの奥さんの？　そういえばこの場にはいらしてないけれど、お加減でも？」
「はい。もともと病がちで奥の間からは滅多に出てこぬ人なのですが、父のことがあってからはあまり食事も取らず……」
「奥方にお会いすることは可能ですか？」
辻堂の言葉に、要蔵は女中に目をやった。
「イヨ。母上の様子を見てきてくれ」
「あ、はい。かしこまりました」
イヨと呼ばれた女中は落ち着きなく座敷を出て行った。
そして彼女が戻ってくるまでの間、辻堂とタギは帝都や国政についてなど質問をしてきたり、見ている方が呆れるほどあからさまに辻堂に媚をへつらったりとしていた。
なるほど。確かに出来た人物ではないらしい。イヨという女中のほうはともかく、少年の身なりなどは寒さを凌げるのかというほど薄く粗末な着物だし、何より丈の合わない着物から除く手足や首などは枝のように細い。きちんとした食事を与えられているのかも疑わしいものだ。

辻堂は適当に受け答えをしていたが、やがて答えることすら億劫になってきたらしく次第にタギや少年にも話を振って来るようになってきた。

そんな会話の中で実のあるものと言ったら、愛想のよい少年の名前はコウというのだということくらいのものだったから、恐ろしく無駄な時間だった。特に辻堂はそう思ったらしく、次第に言葉の端々に棘が増えていったというのに要蔵は全く気付かずに尚も媚を売ってきたからある意味かなりの大人物だ。

やがて辻堂が表情までうんざりとさせた頃になって、ようやくイヨが戻ってきた。

「あの、奥方様がお二方にお会いになられると……」

「そうか。それはよかった。ではすぐに母上をここへお連れして」

「いえそれが……」

イヨは言い淀んだ後、要蔵の機嫌を伺うように彼を見上げた。

「床から起き上がるのはお辛いので、お二方をお部屋へお連れしてほしいと……」

「何？」

イヨの言葉に要蔵は腰を上げ、語気を荒げた。

「何を言っている？　官吏の方々をわざわざあんな薄汚い離れなどにお連れしろというのか！？」

「で、ですが奥方様が母屋までお越しになるのは辛いと仰って……」

「そんなことは知るか！　無理矢理にでも連れてこい！」

目を血走らせ、まるで別人のように要蔵は怒鳴り立てる。

イヨは身を竦ませ、怒声を受け続けていた。

「あー別に俺らが行くからいいよ？」

割って入ったタギの声に、要蔵は慌てて頭を下げた。

大した変わり身の早さだ、とタギと辻堂は目を見合わせた。

「いえ、このような辺鄙（へんぴ）な村までお越しいただいた上に、わざわざ離れまで足を運んでいただくわけには……」

「別にいいって。な？　辻堂」

「構わない。それで離れとやらはどちらに？」
辻堂は冷ややかな視線を要蔵に向けた。
「あの、ですが……」
「それとも俺らが御母上に会いに行くと、不都合でも？」
猫のような笑顔でタギは要蔵を見た。その笑みの下に鋭い牙をちらつかせて。
「……っいえその、そのようなわけでは」
「じゃーいいじゃん。さ、行こう」
「そうだな」
タギと辻堂はそれぞれ立ち上がり、イヨとコウを見た。
「とりあえずどっちか、奥方サマのところに案内してくれない？」
「じゃあ俺が行きます」
名乗りを上げたのはコウだった。
「よろしいでしょうか？　旦那様」
要蔵は不満を顔に滲ませながらも頷いた。
「……くれぐれもお二人に無礼のないように留意しろ」
「はい」
コウはにこりと笑い、こちらですと言って座敷を出た。そしてコウを先頭にして一度屋敷を出た。空気が冷たく吐く息は白い。空はいつの間にか灰色がかっており、今にも雪が降り出しそうだった。
「奥方様は離れを自室としておられまして、一度外へ出て庭を通らなくてはいけないんです。面倒だとは思いますがどうか御容赦下さい」
コウは申し訳なさそうに頭を下げた。
「いや、一応仕事だからお気遣いなく」
「別に謝罪される事ではない」
軽い調子のタギと冷たい物言いの辻堂を前にコウは軽く笑い、改めて「こちらです」と言って庭へと向かった。
外に出てみれば庭は広く、一部に木の棒と綱で丸く囲ってある場所がある。

コウは何も言わないが、おそらくそこが喜兵衛の死んでいたという場所なのだろう。ただ囲まれただけの場所は、言われなければ何があったのかなど想像もつかない。
庭には赤や白、薄紅色の寒椿が咲き誇り、センリョウやマンリョウが小さな赤い実をつけ、威厳溢れる姿の松の大木が植わっている。その外れには石で丸く囲われた花壇のようなものがあり、花が咲いている物は少ないが、この北の地方では見かけない珍しい植物が育てられているようだった。
コウが言うには要蔵は珍しいものが好きで、小さな花壇で育てられている植物も異国産の物や、この辺りではなかなか手に入らない希少な物ばかりなのだという。
そんな庭を通り過ぎ瓦葺屋根の、離れと言うよりまるで土蔵のような建物の前に辿り着いた。
小さな窓、頑丈な造りの扉。まるで牢獄のようだ。
林田家の離れに関する第一印象はそれだった。
タギがぼんやりと離れを眺めていると、コウが白い息を吐きながら頑丈そうな木製の扉を叩いた。
「奥方様。コウです。お客様をお連れしました」
それから錆びたような鈍い音を立て、扉が開かれる。
「どうぞお入り下さい」
深々と頭を下げるコウの前を過ぎ、タギと辻堂は離れへと足を踏み入れた。気づけばいつの間にか雪が降り始めていた。

二話

蔵の中は畳が敷かれランプの灯りがあり、囲炉裏や漆塗りの調度品や古びてはいるが豪奢な着物などがあちこちに置かれた立派な住まいだった。部屋の中心に敷かれた布団の後ろには木製の背もたれがあり、異国から渡ってきた寝具、ベッドに似た形になっていた。
そしてその背もたれに寄りかかるようにして、真っ白な髪をうなじの辺りで束ね、浴衣の上に肩に羽織をかけた老婦人が布団から身を起こしていた。
肌には皺が刻まれ頬は痩せこけているが、切れ長の瞳が印象的な美しい老婦人だった。
恐らく若い時分も相当な美人だったのだろうが、老いても尚、彼女は美しいと素直に思わせる雰囲気を持ち合わせていた。
「林田嘉江（かえ）と申します。わざわざ御足労頂き、ありがとう存じます」
嘉江と名乗った老婦人は深く頭を下げた。表情こそ乏しいが冷たさは感じない。
「どうぞ、お座りになって下さい。コウさん、お客様に座布団とお茶を用意してくださる？」
「はい。奥方様」
コウはいそいそと部屋の隅から座布団を二つ持ち出してきて、嘉江の布団の横に並べて敷いた。それから茶の用意を始める。
タギと辻堂が座るのを確認すると嘉江は口元を押さえ咳き込んだ。コウが慌てて駆け寄ろうとしたが、嘉江はそれを手で制してタギと辻堂に向き直った。
「何分体の自由がきかず、お見苦しい格好で失礼致します」
「いえ。私は辻堂と申します。こちらこそ体調の優れませんところを無理を言って申し訳ありません」
辻堂は膝の上に手をつき軽く頭を下げた。彼は気に入らない相手にはその毒舌を容赦なく振るうが、一般的な人間に対しては最大限

の礼を払う。この変わり身の早さも相当だろうと思いながらタギも頭を下げた。
「タギです。お宅の御子息から鬼殺しを依頼された者です」
「鬼殺し……？」
嘉江の目がわずかに見開かれる。
「鬼殺しなど、要蔵さんが申したのですか？」
「ええ。御子息から地方府に話があり、たまたま私の知人である彼が鬼殺しの可能な僧侶であったので参りました」
嘉江の様子に辻堂も戸惑ったように答える。
「そう……ですか……」
歯切れの悪い口調で嘉江は呟いた。
唐突にタギが口を開いた。
「奥方は、何か憂い事が？」
「憂い……？」
嘉江は顔を上げ、困惑にわずかに眉根を寄せた。
「はい。御子息は奥方が何かに怯えているようだと言っていたので」
「ああ……あの人はそのようなことを言ったのですか」
嘉江は小さく息を落とした。
「庭先で恐ろしいことがあったので、少しばかり気落ちしていただけです」
「随分奇妙な様子だったそうですね。お悔やみ申し上げます」
タギは珍しく丁寧に頭を下げた。そして顔を上げ、まっすぐに嘉江を見据えた。
「御子息は鬼だと確信していらっしゃるようですが、奥方はいかがですか？」
嘉江は切れ長の目を逸らすことなくタギに向け、乾いた唇を開いた。
「主人を殺した者が鬼であろうとなかろうと、そのようなことは私には興味のないことです」
酷く乾いた声がそう告げた。

辻堂は軽く目を見張り、扉の前で控えていた今まさに茶を運ぼうとしていたコウもまた顔を強張らせた。
「コウさん」
「……はい」
コウは嘉江の声にもしばらく反応せずにいたかと思えば、思い出したかのように背筋を伸ばした。
「しばらくお客様とゆっくりお話がしたいのです。席を外してもらえますか」
「ですが」
「お願いします。要蔵さんには私から話しておきますので」
「……わかりました。では何かあればお呼び下さい」
コウはタギと辻堂の前に茶碗を置くと、一礼して扉の向こうに消えていった。
重々しい音を立てて扉が閉ざされると嘉江は大きく息を吐いた。
「私は、もしかすると取り返しのつかない約束をしてしまったのかもしれません」
ぽつりと嘉江は言い、それからタギを見た。
「タギ殿と仰いましたね」
「はい」
「貴方は僧侶ですか？」
「一応は」
「そうですか。では貴方は、鬼とは悪しき者とお考えですか？」
まっすぐな嘉江の視線。
「鬼殺しの僧侶殿。貴方は、鬼とは例外なく殺すべきとお考えなのでしょうか」
タギは常の軽い調子を潜ませ、静かに答えた。
「俺個人の意見で恐縮ですが、必ずしもそうであるとは考えてはいません」
「なっ」
声を上げたのは辻堂だ。官吏であり、鬼殺しの任をタギに任せた

彼としては聞き捨てならない言葉だろう。

「辻堂」

タギは嘉江から視線をそらさぬまま言った。

「悪いけど、お前も席を外してくれないか」

「しかし……」

「頼むよ。これから俺、お前の前じゃ言えないこと言うから」

辻堂は何か言いたげにしたが、ひとつ大きなため息を吐いてから嘉江に一礼し、離れを後にした。

こうして二人だけになった蔵は、日が傾き始めランプの灯りが心許なく照らすだけとなった。

外で舞い散る雪は空気を凍てつかせ、音を奪う。蔵の中もまた、音のない世界となった。

その音のない世界に一石を投じたのは嘉江だった。

「……何故人は鬼を厭うのでしょうか」

嘉江は軽く目を伏せ、呟くように口にした。

タギもまた視線は手の中の茶碗に落とし、答えた。

「鬼だから、ですよ」

深々と雪は外の世界を白に染め上げていく。ランプの灯りが二人の影を濃く映し出す。

「……何故、鬼を厭うことは当然なのでしょうか」

小さな窓から見える赤い寒椿に雪が積もるのを見つめ、嘉江は尚も問う。

「鬼とは厭われるもの。それがこの世界の理だからです」

「一体どなたがそのような理、定めたのでしょう」

淡々と、視線が交わされることはなく、互いの言葉が途切れることもなく問答は続いた。

そして初めてタギは顔を上げ、窓の外を見た。

「平穏を望むなら、考えない方がいいことですよ」

「それほどまでに重いことなのでしょうか」

「貴女の問いは、この世の禁忌だから」

その言葉は静かなのに、この隔絶された空間によく響いた。
「鬼の存在を問うことは、この世界の――この国最大の禁忌。覚えておいた方がいい。間違っても帝都付近や官吏の前でそれを口にしてはならない。そうでなければ、貴女こそが鬼となる」
そして夜の闇のような僧侶の双眸が嘉江に向けられた。
「少しでも安寧を望む気持ちがあるのなら、他の人間のように鬼を恐れていればいい。あれは興味を持つべき対象ではない。鬼は、忌避すべきために鬼なんです」
嘉江はわずかに首を動かし、タギを見つめた。
「タギ殿」
「はい」
「……私は幼い時分、鬼と呼ばれる友人が居りました」
吐き出された声はか細い。
「もう五十年ほど昔のことです」
静かすぎる空間に、窓硝子に雪の触れる音がやけに大きく聞こえた。
「私の故郷の村の外れの山の岩屋に住む、身寄りのない少年が居りました。彼を村の人たちは皆、鬼だと言って恐れておりました」
目を閉じれば遠い昔の記憶が色鮮やかに蘇る。
「山で迷った際に彼とは知らず助けられました。私と同じ年頃で、けれどどこか大人びた雰囲気のある不思議な人でした。それから半年ほど私は彼の元へ時折話をしにいくようになったのです」
だがそれは十四の冬まで。
「私がこの林田家に嫁入りする数日前。その日を最後に彼とは会ってはいませんが」
枯れ木のような嘉江の組まれた両手が震える。
「タギ殿。どうかこの年寄りの昔話につきあっては頂けませんか?」
「ぜひ、お聞きしたいです」
嘉江はか細い笑みを浮かべ、軽く頭を下げてから話し始めた。
「……私は林田家に嫁入りしてきました。そして林田嘉兵衛の妻と

いうことになってはいますが、あれを結婚だったとは考えてはいません。ただ買われただけと、そう思っています」
　絞り出すように嘉江は言った。
「私の生まれ故郷はとても貧しい村でした。常に村人全てが飢えているような、そのような場所でした。一年を通じて寒冷な土地で、実りは少なく飢饉では多くの人間が死に、冬の厳しい寒さにまともに暖を取ることもできず凍死する者が多く出る。生き残るためには家族といえど情を捨てる……そんな場所でした」
　厳しい環境の中で嘉江は生まれ、そして生きた。貧しい村の中でも特に貧しい家の子供として。
「娯楽などなかった。だからでしょう。鬼と呼ばれる人とは言え、親しく話すことがどうしようもなく楽しかったのです」
　幼い頃、飢饉の際に実の兄弟に殺されかけ、飢えて飢えて、やがては鬼となってしまったという友人。
　村人たちは彼を恐れた。時折村に降りてきては人を食らう鬼だと言って。
　だが彼は嘉江が知る限り一度として人を襲ったりなどしていない。
　――俺は鬼だから、飢えて死ぬことはないから。
　そう言って、たまに山で見つけた山菜なども全て嘉江に渡してくれるような人だった。
　嘉江は鬼と忌み嫌われる彼を兄のように慕った。彼も当初は幼い嘉江を疎んじる様子はあったものの、次第に打ち解けていった。
「私は彼を兄様と呼ぶようになり、彼は私をカエと呼んでくれるようになり、野良仕事の合間を見つけては会いに行きました」
　目を細め、嘉江は乾いた唇に柔らかな笑みを浮かべた。
「どんなに辛い生活でも、また兄様に会いに行く。そう思えば痛みも飢えも忘れてしまいました。会ってどうということもない話をして……たったそれだけですが、とても幸せな時間だったのです」
　たった半年。可能な限り会いに行った。
　離れて暮らす家族を求めるように。

厳しい現実から逃げ出すように。
想い人を求めるように――。
「ですがあの冬の日。私が兄様の所から家へ帰ると、父など絶対に野良仕事から帰っていないような刻限だったにも関わらず、親兄弟が全て揃っていました」
隙間風の吹く、家族十人が雑魚寝をするような小さな家だった。その小さな家の囲炉裏を囲み、家族は嘉江を迎えた。
「父はいつもとても気難しい顔をしているのに、それが嬉しそうに頬を紅潮させていたのです。そして私に言いました」
――林田様がお前を嫁にと言ってこられた。
「林田家は当時、この地方で知らぬ者はない大きな家でした。こんなことを言っては自賛と思われるでしょうが若い頃の私は容姿を褒められることが多く、噂を聞きつけた林田家の長男が私を嫁にと言ってきたらしいのです」
自嘲するように嘉江は視線を荒れた手元に落とした。
その横顔は確かに老いを感じるが未だ造形的に美しい。細い鼻も切れ長の目も、これ以上少しのずれも許さないような極限の具合で彼女の顔かたちは構成されている。
長く白い睫毛が伏せられる。
「逆らうことなど、出来るわけもありませんでした」
林田家は嘉江を嫁に出せば村への援助をしようと言ってきた。家だけでなく村全体にとってこれ以上ないほどの話だった。
「ですが私は林田家の男の横暴ぶりも、好色ぶりも幼いころから耳にしていたので嫌だ、と泣いたのです。今思えば、随分私も身勝手な子供だったものです。私ひとりの身で村のどれだけの人間が助かるかなど考えもしなかった。ただ私は……兄様を慕っていた。兄様以外の殿方など目に入っていなかった。……鬼と言われるあの人に、私は恋していたのです」
嘉江は家を飛び出した。
もう夜は近かったし、雪も降り始めていたが関係なかった。ただ

逃げて逃げて、辿り着く先はひとつしかなかった。
「兄様の、元へ……」
枯れ木のような手を握りしめ、嘉江は呟いた。
それがどれほどの罪となるのかなど考えつくこともなく、ただ幼かった自分は想う者の元へと走るしかできなかった。
逃げて逃げて、裸足になって、転んで傷だらけになってもそれでも走った。
兄様のいる、山の小さな岩屋へ。
夜の帳が落ち、月明かりが雪に反射する幻想的な光景だっただろうと思う。もっとも、その時の嘉江にそれを思う余裕などあるはずもなかったが。
もつれる足で山へ入って嘉江は声を張り上げた。
「兄様！　兄様！」
涙が凍り、頬が割れるように痛んだ。吐く息が視界を白く染め、夜の闇よりも鬱陶しかった。
「兄様ぁっ」
彼を呼んで、どうしようと思ったのか。
それは五十年も経った今となってもわからない。ただ、本能のままに彼にすがった。
訝しげに岩屋から出てきた彼にすがりつくように、抱きつき叫んだ。
「兄様、私もここにいたい！　兄様といたいの！」
声の限りに叫び、そして泣いた。
「お嫁になんて行きたくない！　行きたくないよぉ」
彼のボロボロの衣を掴み、大声で喚いた。
何て面倒な子供。誰だってそう思い眉を顰めるだろうに、彼は細い細い手で嘉江の頬を包むようにして目を合わせた。
「カエ。大丈夫だ。大丈夫。俺がいる」
その言葉に嘉江はますます泣き出した。
その間、彼はずっと嘉江を抱きしめていてくれた。

うだと思ったことを覚えている。

嘉江より少しだけ背の高い彼の体は細く、今にも折れてしまいそうだと思ったことを覚えている。

「大丈夫だ。俺がカエを守るから。兄様がカエを守るから。カエが助けてくれと言うのなら、何処へでも助けに行くから」

「ほ、ほんとぉ？」

嘉江が顔を上げると、彼は笑った。

「約束するよ。俺がカエを助ける。だからもう泣かなくていい」

しゃくりあげながら嘉江は頷き、家であったことを全て彼に話した。

「私、林田様のところへお嫁になんて行きたくない。林田様は御大尽だけど酷い人だって皆言ってるもん。そんな人のところ、行きたくない」

「うん」

「それに林田様のお屋敷は遠いの。そんなところに行ったらもう兄様にも会えなくなっちゃう」

「……そうか。じゃあカエ、俺と何処かへ行くか？」

彼の言葉に嘉江は目をまん丸に見開いた。

「どこか？」

「そう、何処か」

彼は無数の雪の降ってくる空を仰いだ。

「誰も知らない場所。温かくて、食べ物がたくさんあって、誰も飢えてひもじい思いをしないような場所」

「そんな場所、あるの？」

「西の海の果てには、そんな場所があるんだって」

彼は小さくこぼすように笑って言った。

「伝説だろうけど。でも伝説じゃなくても南がいい。温かい場所」

「私も温かい場所、行ってみたい！」

身を乗り出すようにして嘉江が言うと、「じゃあ行こうか」と彼は笑った。

嘉江もつられるようにして笑い、彼の両手を握った。そして涙に

滲んだ目に、雪明かりに大きな影を見た。
影は嘉江の視界から彼を奪った。
鈍い音がして、握ったはずの彼の両手が零れ落ちていった。見れば彼は嘉江の足元に倒れている。
「……兄様？」
影を見上げると、村の男が鍬（くわ）や鋤（すき）を手に荒い息をしていた。
いくつもの足音が嘉江を取り囲んだ。
「こっちへ来い。鬼なんかといたら取って食われるぞ」
「お前、鬼なんかと会っていたのか」
低い声に嘉江は身を竦ませた。
それは父の声だった。
父の節くれだった手が嘉江の身を引いた。
「や、嫌だ！　兄様はそんなことしない！」
暴れる嘉江を父や他の村人達が羽交い絞めにした。
「やだ！　離して！　離してよ！」
体の自由を奪われながら、嘉江は倒れこんだまま動かない彼へとにじり寄ろうとした。うつ伏せに倒れ顔は見えないが、彼の頭からは血が止め処なく滲み出ている。
早く手当てをしないと……。
嘉江は自分を取り囲む大人達を見上げた。
「っ兄様が死んじゃう！　離して、離して！　お嫁に行くから！ちゃんと行くから！　だから兄様を助けて！」
だが大人達は嘉江を村へと引きずり戻していく。
「鬼を兄などと呼ぶんじゃねぇ！」
「ここんとこあの鬼っ子もおとなしくしていたと思ったのに、林田様の嫁を攫ってくなんてとんでもねぇ」
大人達は若い衆に目をやった。
「そこの鬼を二度と悪さできねぇようにしておけ。殺すことは無理でも、それくらいはできるだろ」

冷たく恐ろしい言葉に嘉江は必死になって拘束から逃れようとした。
「やめて！　兄様は悪くない！　私が勝手にここまで来たの！　だからやめて！　兄様に酷いことしないで！　お願い、もう会わないから！　ちゃんとお嫁にも行くし、兄様にも会わないから！」
声が枯れても叫び続け。
逃れられるわけがないと知りつつも暴れ。
そうして林田家との婚儀の日まで、嘉江は家に捕らわれた。
水も食事もほとんど口にすることなく過ごした日々、頭にあったのは彼の安否だけだった。
鬼は死なない、殺せない。
そう聞いてはいる。だが実際にどうかなど嘉江は知らない。そもそも彼が本当に鬼かどうかすら疑わしいというのに。もし嘉江が連れ戻されたあの後、彼に何かあったら――。
そう思うと自分の軽挙が悔まれた。
何故あの晩、自分は彼の元へ行ってしまったのか。自分さえいなければ彼はあんなにも血を流さずに済んだのに。
すっかり気力を失った頃、やがて嘉江は見たこともない白絹の花嫁衣装を着せられて輿（こし）に乗せられ林田家の屋敷へと連れてこられた。
婚儀などがどのようなものであったかは覚えていない。夫となる人物、喜兵衛についての第一印象も、初夜の晩の記憶すらない。
林田家の屋敷へとやってきてからも、嘉江はただひたすら彼の無事を祈った。自分はこれからどのような屈辱も痛みも受け入れる。だから彼が無事でありますようにと願掛けした。
それから五十余年。
彼女は林田家にやってきて以来、ずっと禁じていた言葉を口にしてしまった。

三話

「結婚して五年ほどは夫となった喜兵衛は私にあらゆる贅沢をさせ、人形のように着飾らせてきました。ですが子が流れてしまった後、喜兵衛は私に飽き妾（めかけ）を囲うようになりました。以来、私はこの離れにおります。世話役の方と稀に気が向けば訪れる喜兵衛以外の方とお話しするのも久しぶりです。最後に外へ出たのはまだタギ殿とそう変わらぬ歳の頃でしたから」

　つまりおよそ四十年、彼女はこの蔵のような離れに隔離されているということだ。

「するとやはり、要蔵サンというのは奥方の子じゃなく？」

「ええ。喜兵衛がよその女性に産ませた子です。他に跡取りとなる男子が生まれなかったので引き取られたと、世話をしてくれる奉公人の方に伺いました」

　ああ、それで要蔵はあまりよその人間と嘉江を接触させたがらなかったのか。

　人間を四十年も閉じ込めたということが地位も力もある官吏の耳にでも入れば、立場が危うくなるから。

「……長いですね。四十年は」

　タギが生きた時のおよそ二倍。想像もつかない長さをこの女性はこの小さな蔵で過ごしてきたのだ。

　嘉江は曖昧に笑った。

「短くはありませんでしたね。ですがこれもまた兄様を巻き込んだ罰と思い、受け入れました。ですがここ数年、私もすっかり体が弱り一人では満足に歩くこともできず、目も弱り、気が弱くなってしまった。そして……私は口にしてしまったのです」

　嘉江はきつく眉根を寄せ、目を伏せた。

「助けて、と」

——カエが助けてくれと言うのなら、何処へでも助けに行くから。
鬼の彼と交わした約束の言葉を。
たった一度口にしたその言葉。
それから半月もしないうちに、喜兵衛は死んだ。
「……兄様が、喜兵衛を殺したのでしょうか」
虚ろな目が窓の向こうへと向けられる。
「兄様は優しい人でした。あれから五十年も経っている。私のような子供との一時の約束を覚えているとも、今もまだこの地に住んでいるとも確証は持てません。ですが……もしも、と考えてしまうのです。私の言葉が、兄様を殺人へと駆り立ててしまったのでは、と」
その目から、一筋の涙がこぼれた。
「喜兵衛を殺したのが兄様だとしたら、私が助けてくれなどと言ったせいです。私は、あの人を傷つけ続ける……！」
吐き出すように言うと嘉江は激しく咳き込み始めた。
タギは背をさすり、出されたままますっかり冷めてしまった茶を飲ませようとするが、嘉江は苦しげな音を発し、そしてまた咳き込むことを繰り返した。
「今、誰か人を……」
「いえ……だいじょ、ぶ……」
「そういうわけには」
タギが立ち上がりかけた時、両手で押さえこまれていた嘉江の口元から赤いものが吹き出した。袖口から除く細い腕を伝い、赤い血が浴衣と寝具を濡らしていく。ひゅーひゅーと苦しげに息をしながら嘉江は尚も咳き込み、背もたれから流れるように倒れこんだ。その袖から覗く細くやつれた腕には、薄い青紫色の斑点。
「これ、は」
タギは嘉江の腕を取って息を呑んだ。
「奥方……貴女は」

嘉江は呼吸を整えながら、今にも壊れそうな笑みを浮かべた。
「罪には罰が、必要でしょう……？」
タギはほんの一瞬、涼しげな顔に苛立ちを浮かべてから懐から竹筒に入った丸薬を取り出して強引に嘉江の口に入れ茶で流し込んだ。呆気にとられたようにしていた嘉江にタギは厳しい声音で言った。
「俺の友人が薬種に詳しいんです。奥方の症状は、今飲んだ薬で程度緩和させられるはずだ」
嘉江は次第に呼吸が落ち着かせながら、タギから目を逸らした。
それを追うタギの表情と声は低く厳しい。
「貴女は、いつから毒を飲んでいたんですか？」
「さぁ……いつからでしょう。気づけば食事に混ぜられていたようなので、私にもよくわかりません」
「貴女が飲んでいる毒は、この屋敷の庭で要蔵が育てているとか言う珍しい植物から採取されるものだ」
「そうでしたか」
嘉江は表情一つ変えない。
知っているのだろう。要蔵が、義理の息子が自分の死を望んでいることを。
「緩やかに人を死に至らしめる、いくつかの地方では取り扱いに資格と許可が必要となる、毒だ」
ようやく嘉江の呼吸が落ち着き、彼女は袖口で血のついた口元を拭った。
「危険な植物、なのですね」
「ええ、とても」
タギは答え、水瓶の中から椀に水を汲んできて嘉江に渡した。
「毒と気づいていて緩やかに死んでいくことが、貴女なりの罪の償い方ですか？」
「……ええ」
水を一口含んで嘉江は答えた。それからタギの顔を見た。
「もう私は、長くはないのでしょう？」

タギはしばらく黙ってから、小さく頷いた。
「薬を飲んでも、貴女の体を蝕む毒は全身を回っている」
「そうですか。道理で近頃は特に体が弱っていっていると思いました」
微かに笑い、嘉江はよろめきながら立ち上がろうとした。反射的にタギは彼女に肩を貸し、何とか支えた。
「外へ出たいのです。少しの間、肩を貸しては頂けないでしょうか？」
「わかりました」
一歩一歩。今にも崩れ落ちそうになりながらも、嘉江子は自分の足で歩いて行く。
「今日は雪なのですね」
「ええ。さっき降ってきてましたね」
「そうですか。……そういえば兄様と最後に会った時も雪だった」
掠れる声で呟き、裸足のまま嘉江は蔵を出た。
タギが自分の草鞋（わらじ）を貸そうとしたが彼女はそれを断り、蔵の壁を支えに雪の上に一歩足を踏み出した。
「ああ、冷たい。雪はこんなにも冷たいものでしたか」
どこか嬉しそうに嘉江は言った。
いつの間にか日は落ちていたが、雪明りで辺りは薄らと明るい。
嘉江は一本の木を見て頬を綻ばせた。
「これは……椿ですか？」
「多分、山茶花（さざんか）ですね。寒椿（かんつばき）とも言うらしいですが。花には詳しくないので保証はできませんが」
恐らく嘉江も言っていた通り弱った目ではもうよく見えないのだろう。指でなぞるようにして、その形を確かめていっている。
「昔から蔵の中からはいつも見ていましたが、こうして間近で見るのは初めてです」
白い手をそっと伸ばし、赤い花弁に触れると積もっていた雪が落ちた。

こうしているととても年齢を重ねた人には見えない。
まるで少女のままのような人だ。
「――タギ殿」
嘉江の触れた赤い寒椿が首から落ち、雪に赤い花弁を広げた。
「はい」
「どうか私の願い、聞き入れては頂けないでしょうか」
「話によってはですが」
「……鬼殺しの貴方にこのようなことをお願いすることはおかしいとは思いますが、喜兵衛を殺したのがもしも鬼だったとしても、殺さないで下さい」
「罪を見逃せと？」
淡々としたタギの言葉に嘉江子は黙り込んだ。
タギは白い息を吐き出し、寒椿から屋敷の母屋へと視線を移した。そして眉を顰める。
「この家は、夜が来ても灯りをつけない主義でも？」
「え？」
タギの不審げな声につられるように、嘉江も母屋を見た。
屋敷の母屋には一つの灯りもついていない。
「おかしいですね……出かけたのでしょうか」
「官吏のもてなしに外で食事、とあの息子サンなら考えられそうですけど、それでも誰もいないってことはないでしょうしね」
それにあの要蔵という男の性質なら、外へ連れ出すより屋敷内でもてなしたがるとも思うのだが。そもそも食事に出るのなら、一応辻堂が呼びにきてくれるだろう。
「何か妙だな」
雪の静けさがそう思わせるのか、妙に張りつめた空気が肌に痛い。
深々と雪は降っている。白に世界を染めていく。
何故かそれがやけに恐ろしいと感じた。
「……俺は少し母屋を見てきます。それから色々と話をしなければなりませんけど」

「はい」
「とりあえず一度離れに戻って待って」
タギが彼女の手を引いた瞬間、全身が総毛立った。
反射的に背後を振り返ると、そこには雪明かりに照らされる小さな影があった。
「彼女をその牢獄に戻す気か？」
少し高い声が尋ねる。
ぽたり、ぽたりと何かがその手を伝って滴る。
それは寒椿と同じ色。
赤が滴り落ちる足元には、要蔵の集めたという珍しい植物が無残に踏みつけられている。
その細い足が一歩、雪を踏みしめタギに歩み寄った。まっすぐに見上げて来る目には深い闇。タギの目に映った、その細い手足や顔には無数の赤が。
雪明かりに照らされ白い頬を赤が伝う。
タギは深く息を吐き、嘉江に渡していた錫杖を手に取った。
「お前が鬼か」
「まぁね」
愛想の欠片もない素っ気ない声に溜息を吐きたくなる。
「猫、被ってたのかよ」
「愛想をよくしておくと人の間に紛れやすいんだ」
それは初対面のおしゃべりで愛想のよい少年という印象からは程遠い調子。
「おかげでこの家にも潜り込めた」
林田家の奉公人の少年、コウは冷ややかな声音でそう言った。？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3584y/

三ツ世巡り　雪、幽か

2011年11月15日03時13分発行